

のである。平地の戦闘は全くない。山から山への山岳戦であった。

私は昭和十五年一月三十一日の攻防のとき、大隊本部から伝令として中隊長へ命令を持って駆けつける途中、左腕に機関銃弾を受け衛生隊に収容された。命令は衛生兵の手を経て中隊長に届けられた。

軍医の診断の結果、「左肘間接骨折貫通銃創」として台湾送還となり七月退院、原隊復帰後、召集解除となり二年五カ月ぶりに我が家に落ち着いた。

職場復帰後二年目、企業台同のために新会社が設立され転出した。六十八歳の父は私に結婚をすすめたが、いつ再召集されるかわからない身を思えば結婚も気が進まない。しかし、たつての頼みには勝てず結婚に踏み切った。二十七歳であった。

十九年五月ついに再召集令がきた。既に二児の父親であった。入隊先は同じ台歩一補充隊砲銃隊であった。結局、台湾で八月十五日を迎え、戦わずして敗戦となり九月一日召集解除、妻子の待つ疎開先の仮住居に復員した。昭和二十一年三月、十三年間の思い出深い台湾の地を後

に郷里熊本に引き揚げた。

沈黙考の末、国有林の払下げを受けて製炭を決意し山深い国有林に入り作業に従事すること四年。長女の入学までには学校の近くへ出ることも叶わず、辛苦の山暮りであった。

その間、老父の急死、第三児の出生等々あったが、昭和二十五年、農協職員に迎えられ辛うじて山暮りを脱出することができた。農協在勤十年の後、スーパーマーケットに迎えられ、店の拡大発展とともに専務としてその責を果たし、昭和五十三年一月病を得て退職、現在に至っている。

湘桂作戦に参加して

愛知県 近藤 光次

昭和十九年六月三十日歩兵六連隊に召集、七月二日午前二時、軍衣袴、牛蒡剣、雑糞、外被、巻脚袴、地下足袋にて名古屋を出発、下関へ。関釜連絡船ジグザク航行

にて釜山着、公会堂に一泊。夜明けに貨車に乗車、直ちに出発、九日浦江着、揚子江渡河、南京兵站宿舍入り。

二、三日待機中に飯盒、水筒、小銃を支給される。

夕方乗船、夜間航行、夜明けとともに上陸、退避、の繰り返して漢口着下船。行軍にてヤンズ兵站宿舍に向かう。貨車、船のスシ詰め輸送のため足の弱かった我々は、「夏の漢口は雀も落ちる」といわれる七月の炎天下の行軍で日射病続発、石油タンク群の衛兵所で水の補給を受け、病人を柳の日陰に寝かせ、胸を広げタオルで水をたらして看護し、肩を貸して兵站宿舍に入る。

宿舍で待機中各兵科より弱兵を募り曉に配属部隊を編成す。小田兵長以下百数十人にて小隊を編成、同地発、漢陽一泊、翌日より夜間航行にて夜明けに岳州着、以後洞庭湖を渡り湘江を上り長沙、湘潭着。対岸に上陸、宿舍に入り、翌朝より主計曹長の指揮により食糧調達任務および警備につく。

前線にてコレラ発生。生水一切口にしないこと、必ず火を通すこと、下痢嘔吐あり次第申し出よ、等々の通達あり。

小田隊一部を残して易俗河移動、幸各隊全員集合、ブンドウ豆の大倉庫を宿舍とした。

毎日午前と午後定期爆撃があり、昼間は蝟壺に入り仮眠、夕方より追及部隊の渡河（工兵隊）。我々は弾薬、食糧、被服等の荷揚げ作業に従事する。これが毎日の繰り返しである。

毎日ブントウ豆の塩ゆでを食べ食糧不足を補ってきた。渡河中軍馬、車両、戦車等水没することあり。

曉、幸、三七〇二、小田隊、第二船舶輸送司令部漢口支部気付にて手紙が出せるようになる。軍靴の支給あり、戦闘または移動のとき以外は使用禁止。衛兵勤務、作業は地下足袋、それ以外草鞋（わらじ）を作り使用すること。そのために薬の支給あり。二十年の正月は易俗河にて過ごす。

一月株州、衡山へ先発隊出発。

湘江の支流に後送患者を待機させ入船を待つ。下船せる便乗兵の中に豊橋出身の近藤郵便局員があり、作業終了後班内にて内地の事情、特に三河大地震のあったことをくわしく知らされた。各分隊一週間の交代にて、司令

部の裏にある五〇〇ほくらい先の小部落の突端で船団通過の監視につく。

第二先発隊として夕方衡陽へ出発、翌朝衡山着、先発隊の所で夕方まで世話になる。彼らは警備を兼ね豚、鶏を飼育中なり。

衡陽警備、物資陸揚げ、野戦病院の使役等行う。二十年八月、松山兵長以下十余人、工兵隊長の指揮下で患者護送船団を作り、指揮艇に警乗兵として同乗。その他の艇は二階建てに改造し患者を乗船させ、夕方長沙に向けて下る。毎朝数人の死亡者を埋葬処理しつつ下る。

長沙にて患者下船中空襲。しかし敵機は伝單びらを撒いただけで飛び去っていった。これでソ連の参戦を知る。七月に長沙に上陸した時は無人の街であったのに、復興目覚ましく大都会の感あり。

病院へ患者を届け、帰りに郵便局で近藤局員に会う。易俗河を引き上げて来たとのこと、無事を喜びあう。元気だね、俺たちは衡陽へ上るといって別れた。

岳州へ出発。ドラム缶を満載、闇夜の洞庭湖で水路の目印にしたタルを見失い、一晚中走り続け元の所へ戻っ

て来た。湘潭近くより空襲もなく、隊長の命令により昼間航行に切り換える。

八月十八日衡陽着、直ちに四人一組にて長い坂道を肩にかついで荷揚作業。司令部に報告、ご苦労、戦争は終わった。解散の一言なり。

翌朝司令部より、明日漢口へ出発せよ、との命令。

八月二十日、帆前船にて船団を組み、各船に暁の操船兵一人を配備した。私は、松本上等兵とともに警乗兵として乗船、湘江を下る。

急に後方でチェコ銃の音。「左後方土手の敵を攻撃せよ」と上等兵の声。土手に見える動くものへ応戦中、上流の指揮艇より「一隻が集中攻撃を受けている。応援のため引き返せ」の伝令。被害船の近くに上陸し、一夜警備。大きな木造船で船足が遅いので、集中攻撃を受け数人の戦死者が出たらしい。全く犬死だ。翌朝、船を捨て分散乗船して下る。

九月十五日、漢口上陸。同時に住人に襲われ、持ち物を奪われる。先にいた戦友が飛んで来て「発砲するな」

「発砲すると銃殺されるぞ」と言う。何もせずに固まっ

ているばかりなり。保安隊も見て見ぬふりである。宿舍まで行軍、宿舍内は住民が自由に出入り出来、時計、その他貴重品を見れば奪い、手出しはもちろん、口出しも出来ない有様なり。

九月二十日ごろ武装解除。街の中心部へ移動。共同便所、防空壕の汚物を揚子江へ捨てに行く。作業の往復には石や物を投げられた。毎日、この作業を続けた。

四、五日の行軍にて湖北省黃岡県團風花園保に移動、軍行路建設工事に従事。民家の土間に藁を敷いて暮らし一冬を過ごす。

二十一年五月、復員のため移動、九江より無蓋車にて上海へ。特別市政府三階に待機、六月博多上陸、復員。

(後記、昭和十五年宜昌作戦と比べて)

南京を出てからの制空権の無い悲しさ。終戦までの一年余はもぐら生活だった。弾薬、食糧等思うほど輸送も進まず。

衡陽では反転途中、六連隊長に空襲の合い間を見て申告をすまず。大隊砲小隊を訪ね一別以来の戦友に会い喜びをともしするも、大川が退避が遅れて敵機の機銃掃射

で戦死。患者後送中いかに多数の兵士がコレラで死んだことだろう。手当ての仕様がなない。

易俗河のブンドウ豆。河北省ではハスリ貝その他カエル、ヘビ、スッポンなどを食べた。四月ごろより暖かくなり、軍服の裏地、毛布その他下着まで売って命をつないで来た。もう一度冬を過ごしていたらどうなっていただろうか……。

浙贛大作戦体験記

大阪府 北口 功 忠

私は昭和十五年九月五日、鳥取中部第四十七部隊第九中隊に入営す。同年兵は直ぐ北支に派遣され、私は初年兵教育のため、同年兵より約一年遅れて、初年兵とともに昭和十六年三月十五日宇品港を出港、三月十九日に塘沽港に上陸、三月十七日河北省石門に到着、三月二十四日河北省鉅鹿県鉅鹿到着、部隊全員と合流す。

我々の毎日の勤務は、肅正討伐である。日本側につく